



▼感謝のうちに行動する▼

校長 小田 恵

9月1日、夏休みが明けて校舎に生徒たちが戻ってきました。

この日は中学校と高校に分かれて開かれた合同朝礼にて、校長からの話、ウイリアム神父による「ケルブ神父記念日によせて」の祈りとお話、表彰などが行われました。

9月1日は「防災の日」でもありますので、午後の高校生にむけての校長の話は、以下の祈りで始めました。

この世界を造り、わたしたちを守ってくださる神さま、わたしたちが自然の中で生き、自然と共に生かされていることに感謝します。

大雨による洪水や地震などの自然災害、そして紛争によって苦しむ人々のためにあなたからの助けと励ましを与えてください。

そして、わたしたちと自然が共にあなたによって造られたものであることを、忘れることがないようにしてください。

あなたはどのような時にもわたしたちから離れることなく、喜びや悲しみや苦しみを共にしてくださいませ。

神さま、傷ついている人々のために、行動を起こす決意をわたしたちに与えてください。神さまがわたしたちになにを望んでおられるのか、日々の学びの中から知ることができますように。

主イエス・キリストのみ名によって。アーメン。

(生徒手帳 p11～p12 掲載)

この祈りは東日本大震災を受けてつくられたものですが、11年前の大震災だけでなく、日本の、そして世界各地で起こる自然災害、そして、人間も神の被造物だという観点からすると、紛争・戦争などの人間の仕業に対しても適切な祈りです。

私は洛星の生徒たちには、特に最後の段落「傷ついている…日々の学びの中から知ることができますように。」という祈りを心に刻んでほしいと思います。この祈りにこそ、洛星の目指す教育理念が込められているからです。学校という環境のなかで、「心」と「頭」、そして行動力という意味での「体」を育み、バランスのとれた(almighty とか安定だけを目指すわけではありません)人間として成長していつてもらいたいと願っています。

さて、1週間後に控える文化祭は、生徒にとって「行動力」「実行力」を発揮する場です。「まつり(祭)」という賑やかで、華やかなイメージが先行するからでしょうか、たくさんの外来者が来る中で開催したいという強く願っている人も多いことでしょう。しかし、依然コロナ感染が楽観できない状況で、まずは、「生徒のための文化祭」を実現してもらいたいと思います。文化祭の取り組みを通して成長し、その成長を自ら確認し、そして最も身近で見守ってくれた家族とともに感謝する—これが「まつり」本来の意味にもかなっているのではないのでしょうか。

感謝のうちに文化祭が行われますように。